

国際ロータリー第2630地区 地区大会基調講演

「Rotary—かえりみて、あすを考える」

国際ロータリー第 2680 地区 パストガバナー 久野 薫(神戸東)

はじめに

国際ロータリー第2630地区の皆さん今日は。国際ロータリー第 2680 地区パストガバナー久野 薫でございます。神戸東RCに所属して、28 年になります。 本日は当地区の地区大会にお招きいただき大変光栄に存じます。

本日の講演は、かれこれ1年前、劔田ガバナーから直接既にご依頼を受けておりました。当時、ガバナーは「**職業奉仕を中心に据えた日本ロータリーの精神文化の伝統は今どこに行ってしまったのか**」という問いかけでございました。いよいよ年度が始まり、ガバナー月信をお送りくださいました。そこには“**One profits most who attends most**”(最も出席するもの、最も報われる)という劔田ガバナーの信条が提示されておりました。この信条は劔田ガバナーが高山中央 RC のチャーターメンバーとなられたところからの、ご自身のロータリーライフの中核となる価値観であったようです。変貌してやまない RI の中であって失いかけているロータリー哲学の復活を願う劔田ガバナーの熱い情熱とリーダーシップが感じられたのです。

本日は劔田ガバナーの御意向を頭に描きながら、ロータリーのこれまでをかえりみて、歴史から何かを学びとり、これからを考えてみたいと思います。それと共に、本地区大会のスローガンである“和の心を文化に”、“明日の白駒さんの“日本人力の凄さ”ではありませんが、奉仕哲学復権にかける“日本精神”への期待のようなものを語ってみたいと思います。なにせ私のロータリーに関する見識なんて底浅いものです。大したお話は出来ませんが、お付き合いいただきたいと思ひます。

私がロータリークラブに入会した 1988 年頃には、まだロータリーには、単なる職業人の社交クラブではなく、倫理運動体、人づくりの組織としての雰囲気は残されていたように思ひます。“ロータリー運動というのは今もって「人類文化史がこの 20 世紀の時代に刻印を打った職業人の最も優れた倫理運動である」と語りつがれています。

倫理運動体と言っても決して宗教的なものではありません。もともと倫理という言葉は仲間同士の理を意味するのです。ポール・ハリスも「ロータリーは宗教でもなければ宗教に変わるべき何かでもない、それはただ古くからある道徳観を現代生活、とりわけ職業生活において実践しようとするものなのだ」と語っております。奉仕の理念というの

はそういったものだったのです。ロータリーの基本的な道徳観は、欲望の自己制御と、他者への奉仕ということです。隣人愛であり、ロータリーの心ということが出来ます。道徳の導く理想であり、良識の導く理想の世界を求めたのがロータリーという世界だったのです。

しかし今のロータリーには何となく閉そく感が漂っております。この頃のロータリーは何となく変だと感じさせる何かがあります。第 2740 地区(佐賀、長崎地区)の 1995～96 年のパストガバナー、佐古亮尊氏がおっしゃっておられました、「これで良いのかロータリー」と問われれば、RI は各ゾーンから選抜された理事による議論で方向付けが行われているのだから、これで良いと言わざるを得ないが、ロータリーの現状には納得のいかないことがあまりにも多くて、素直にこれで良いと言えない面があります」と、10 年以上前からを振り返って仰っているのです。1990 年頃からのことでしょうか。そしてこの傾向が顕著になったのは、つい数年前からのことです。2011～12 年度の RI 会長カルヤン・バネルジー氏は「ロータリーは今厳しい試練の前に立たされている。多くの人々がロータリーを去って行く。彼らは何に失望して去って行くのでしょうか」と問いかけられたのです。これらの疑問のよって来る原因はどこにあるのでしょうか。

1990 年と言えば既にロータリーの会員数が 120 万人に近い飽和状態に達し始めたときです。ロータリアンの多様な価値観のために、たとえ RI 会長、RI 理事と言えども、日本のロータリアンのそれとは必ずしも同一ではなくなりました。価値観の多様化にとどまらず、これから述べようとするシェルドンの名前も、決議 23-34 号も知らないロータリアンも少なくないというのでは何をかいわんやであります。

1927 年ベルギー、オステンドの世界大会でロータリーの創設者ポール・ハリスは「“奉仕の理念”は哲学ですからみだりに変えてはなりません。いや絶体に変えてはなりません。しかし奉仕活動の実践は、社会のニーズに従って大胆に変化させなければ誰からも頼りにされないばかりか、相手にされません・・・」という有名な言葉を残しております。

1905 年創立以来、ロータリーは爾来 111 年間社会のニーズに合わせて大胆な変貌の歴史を刻んできたのです。

今日、ロータリーが多様性を持つようになった理由には、組織の巨大化に伴い、ロータリアンの性別、職業はもとより、民族、国民性、政治形態、宗教、言語等個人による温度差、東西の温度差、資本主義の落とし子、貧富の格差社会からくる、南北の温度差、社会的ニーズの変貌等多数の要因が考えられます。それによって価値観、ロー

タリーに求められるものが変わってくるのです。それに加えて、そもそものロータリーが、親睦か奉仕か、クラブ奉仕か、職業奉仕か、国際奉仕か、青少年奉仕か、多面性を抱えながら発展してきたため、本質的に曖昧さを持っているのです。

この曖昧さは、fuzzy というより ambiguous ともいうべき曖昧さなのです。因みに私はこの曖昧さ、そしてそれを許容する、理念、目的の、懐の深さ、曖昧さが、ロータリーという組織が永い歴史をもちえた源泉であると思うのです。曖昧さの持つ力であり、魅力でさえもあります。同時にこのファジーさは認知度低迷の原因でもあるのです。

勿論組織が永続するには、組織自体に魅力がなければなりません。どこに魅力を感じるかは、各人によって異なるのは当然のことなのです。少なくともいえることは、動物は快感を求めて生きています。人間は感動を求めて生きています。人間の脳は、長い進化の過程で、人に喜びを与えることで快感を覚えるように仕組まれているのです。生きる知恵でもあります。感動、人に喜びを与えることの出来るクラブでなければ、いかに組織のファジーさを許す曖昧な奉仕の理念であっても、組織は長くは続かないのです。このことだけは記憶にとどめておいていただきたいと思います。

What's Rotary?

かくして”ロータリーって何？”と問いかけてみたくなるほど多様であります。ゴルフのジョン・ヘンリー・テラー(全英オープン5回優勝の19世紀末、英国近代ゴルフ界の3人の巨人の一人)は「このゲームを単なる娯楽とみなすものにとって、ゴルフは永遠の謎となるであろう」と語りました。「この私的な社交クラブを、単なる親睦、友愛だけのクラブとみなすものにとって、ロータリーは永遠の謎となるであろう」。と言い換えることが出来ます。一言にして曰く、言い難しであります。従ってこの問いかけは、変貌してやまないロータリーにあって、今後も続いていくであろう、古くて新しい永遠の疑問なのです。

この度、刃田ガバナーが地区の会員の皆様に問いかけられた”ロータリーって何“によって、この地区の皆さんのロータリー観がどのようなもので形作られていることを知ることは楽しみであります。

奉仕の理念

”奉仕の理念”とはその中身は何でしょうか。職業奉仕とはどのように関わっているのかを知るために、改めて”奉仕の理念“を考えてみましょう。1910年、全米ロータリークラブ連合会の大会で、A・F・シェルドンが、彼が経営するビジネススクールで見出した、因縁果律を駆使して導き出された、販売学の科学的理論を発表しました。それは“*He profits most who Serves best*”であります。このモットーをロータリー運動の中心に

据えた”ロータリー要綱”を起草するように連合会から依頼された、シアトルロータリークラブのアーネスト L・スキルズ会員と、ジョン・ナトソン、ジェームズ・ピンカム草案の中でシェルドンのモットーを基本にしたロータリー哲学が、Ideal of Service と表現されているようです。

決議 23-34 号(綱領に基づく諸活動に関するロータリーの方針)の中にも、“Ideal of Service”という言葉と、その意味するところが「ロータリーは基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的欲求と義務及びこれに伴う他人のために奉仕したいという感情との間に常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕—「超我の奉仕」-の哲学であり、「最もよく奉仕する者、最も多く報われる」という実践原理に基づくものである。に要約されています。

1934 年ポール・ハリスは“*This Rotarian Age*”(ロータリーの理想と友愛)という著書を著しました。この中でも Ideal of Service が用いられております。これを米山梅吉氏が後年”奉仕の理想”と邦訳したものであります。

1911 年ポートランドの大会で、“最もよく奉仕する者、最も多く報われる”が再度発表され、同時に発表されたミネアポリス RC の B. F. コリンズの“超我の奉仕”の二つが非公式のロータリーの標語として採用されたのです。両者は同根のもので、表現を変えた黄金律であり、互いにハイフンで結ばれるべき、職業奉仕の哲学であります。実は“超我の奉仕”は単に相互取引による相互扶助を仲間内以外にも広げようという、いわば単なる互惠主義の拡大にすぎない職業奉仕哲学でありましたが、現在では”超我の奉仕”が、ロータリーの半ば永遠のモットーとされています。“超我の奉仕”が、いかにも滅私の奉仕、無私の奉仕のように思われた言葉の綾のせいでしょうか。

しかし“超我の奉仕”よりも、シェルドンの標語が日本人の心酔するところになりました。なぜならば、古来わが国で伝えられてきた、石田梅岩の石門心学、“奪うに益なし、与うるに益あり”の二宮尊徳の推譲の理論、近江商人の三方よしの考え方に相通じるものがあつたからであります。1921 年シェルドンは「*Philosophy of Rotary*」の論文を発表した後で、エディンバラの世界大会でスピーチしております。

このように“奉仕の理念”はその誕生のいきさつから考えられるように、職業を営む過程から生まれたもので、職業を営む過程からしか習得できないと言っても過言ではありません。職業奉仕を否定してロータリーは存在できません。

しかし今日の西洋のロータリアンでは奉仕の理念の習得は、職業奉仕哲学の習得とは無縁だと理解されているのです。就労経験の有無は全く関係がないという認識であ

ります、現在の RI 理事の中にもこう言うてはばからない理事も少なくないのです。これは私にとって驚きであります。2013 年規定審議会は専業主婦の会員資格を認定したのです。これだけの東西の温度差、乖離があるのです。

「超我の奉仕―最もよく奉仕する者最も多く報われる」と表現される“奉仕の理念”は“究極のサービスの形”“究極の利他”“他人のことを思いやり、他人のために尽くす”と言い換えることが出来ます。

此処で、特にわれわれ日本人が理解しておくべきことは、Service は決して無償のものではなく、社会に価値あるものを提供する行為、Service に対して結果として代価、Profit を生むということです。Service と Profit は原因と結果、表裏一体のものであります。Profit とは決して功利的な概念ではありません。しかし精神的意味合いではなく、あくまで金銭的利益ではあります。職業を神への奉仕、天職と考える英国人はこのことを嫌っているのです。

ロータリーの目的

ロータリーの理念を、もう少し具体的に表現したものが「目的」であるはずですが、ロータリーの目的は、ズバリ「ロータリーの目的」の中にあるはずですが。原文は1935年メキシコシティ世界大会でほぼ現在のものが出来上がり、1951年のアトランティック世界大会でobjectsの複数形がobjectの単数形に変更されて以降、半世紀以上なんらの変更も加えられておりません。我が国では、かつての「ロータリーの綱領」は、2013年に「ロータリーの目的」に改訳されております。

主文は「The Object of Rotary is to encourage and foster the Ideal of service as a basis of worthy enterprise and , in particular, to encourage and foster」で、邦訳では「ロータリーの目的は、意義ある事業の基礎として奉仕の理念を推奨し、これを育むことにある。具体的には、次の各項を奨励することにある。」と続きます。次の4項を一体化して表現すれば、“身の回り万般に亘って、奨励し、育むこと”となるのです。

ここで誤解してはならないことは前文を補足する4項目は決してロータリーの4大奉仕に対応したものではないということです。そんな誤解の為か、2016年の規定審議会でも2010年度からの5大奉仕部門に併せて、「ロータリーの目的」に青少年奉仕に関する第5項目を追加する提案がメキシコからなされ、否決されました。またRI理事会からも提案されようとしたが事前に撤回されております。RI理事会と言えどもこの程度の認識であります。

もし“as a basis of worthy enterprise”を“奉仕の理念を意義ある事業の基礎と

すべし”と翻訳すれば職業奉仕こそがロータリーの目的となります。もしそうであるならば、ロータリーの理念、アイデンティティーは“奉仕の理念”であり、目的が”職業奉仕”となって判りやすいものになるのですが、その後のロータリーの歴史は、職業奉仕はロータリーの目的ではなく、ロータリーの理念を適用すべき一部門であることを裏付けております。しかし各奉仕部門の中でも、とりわけ職業奉仕において実践しようとする組織なのです。他の奉仕部門は、職業奉仕あつてのものなのです。

1928～31年の米山梅吉氏に次いで、戦前1931～33年までの2期にわたってガバナーを務められた井坂孝氏は、「ロータリアンたる者、いたずらに慈善活動に憂き身をやつすことなかれ」と語り、何よりも職業奉仕の重要性の認識を示したのです。

戦後の職業奉仕観の東西の温度差

2007年からクラブ定款第5条に4大奉仕部門(現在は5大)の条項が掲載されるようになりました。そこには、各奉仕部門におけるクラブのとるべき哲学的および实际的基準(Philosophical, Practical framework)が定義づけられています。その中であつて“Ideal of Service”の文言を使って定義づけられているのは、唯一、職業奉仕の定義だけです。他の奉仕部門は全てが实际的な側面だけで定義されています。つまり、奉仕と言えば須らく善だと錯覚し、職業奉仕以外の奉仕部門の定義は、理論無き奉仕の広がりであります。

然しこの度、職業奉仕の活動の定義は、あまりにも哲学的基準の定義に偏っているとして、先の2016年の規定審議会で、職業奉仕活動において会員が採るべき实际的、具体的活動を加えるための制定案が日本から提出され、採択されたことは皆さんの記憶に新しいところであります。変更点を一言にして表現すれば職業上のスキルを社会に役立てる、ジョン・ジャームRI会長の言葉を借りれば“Using our jobs to Serve”であります。

このようなわけで職業奉仕は、今の今まで哲学的枠組みで定義されていたものが、職業上のスキルを利用した社会奉仕活動という、实际的側面で定義され薄っぺらなものになってしまったのです。

2011年から職業奉仕に関する声明文としてロータリアンの行動規範が手続要覧に掲載されております。当初は8か条、2014年1月RI理事会決議で5か条になりました。その中でも職業奉仕を職業上で得られたスキルを利用して社会に奉仕すると定義づけられております。また他に“事業または専門職上の関係において、普通には得られない便宜ないし特典を同輩ロータリアンに求めない”があります。この条項は2014年10月に、RI理事会決議で削除され、4か条になりました。仄聞するに、ラビンドラン RI

会長エレクトが「ロータリアンに特典を」の精神で、提案し RI 理事会がこれを承認したのです。もしこれが事実とするならば驚くべきことであり、RI 会長と言えどもこの程度の認識なのです。このことは相互扶助の復活、強調であり、真の職業奉仕の後退ではないでしょうか。もしロータリアンに特典があるとすれば、それは、例会において自己研鑽、切磋琢磨して得られる、実力の涵養と人格の形成のみのはずではありませんか。

戦後の RI は奉仕哲学の追求ではなく、奉仕活動の実践重視に傾斜していきます。これは飽和状態に達した会員の多様性化から来る価値観の多様性がもたらしたものであります。しかし“奉仕の理念”の軽視は、とりもなおさず、職業奉仕の軽視であります。ジョークにある、世界に無いものが四つある。①アメリカ人の哲学者②日本人のプレーボーイ③ドイツ人のコメディアン④イギリス人の作曲家であります。アメリカ人にとって哲学は苦手の様です。奉仕の理念は哲学なのです。

かくして欧米の戦後における職業奉仕は、**職業上のスキルを利用した社会奉仕活動**であり、医者が無医村に行って医療相談、治療を行う活動、弁護士によるへき地での法律相談、職場訪問、若者の就職支援、職業相談等々、我が国では社会奉仕と考えられる奉仕が職業奉仕と考えられ、哲学的ではなく、実際の側面として、事例報告の形でしか語られなくなっているのです。一方我が国では、戦前と同じように、職業を営む行為自体が奉仕でなければならないのです。義を以て利する、先義後利の精神なのです。

わが国の古典的な職業奉仕観は、今や、お呼びではないのです。世界の標準から、かけ離れた日本特有の職業奉仕観であります

ロータリー現在、世界社会奉仕の登場

このように世界は”ロータリーの目的“を、われわれのように職業奉仕とは解釈しませんでした。あくまで職業奉仕は各奉仕部門の一部門と解釈したのです。RI は 1947 年に RI 理事会の常設委員会の中から廃止されました。40 年後再開されても、個人、クラブの責任に帰せられて、以後も、改廃が繰り返されてきているのです。

戦後、RI が奉仕哲学の追求から奉仕活動の実践に傾斜していったことと、あいまって、ロータリー財団事業が RI の重視するところとなりました。今やロータリーの現在は財団抜きには語ることは出来ません。

「ロータリー財団」というのは、あくまで“RI の財団”であり、RI に従属した組織であります。RI の方針に従って、教育、人道的な奉仕活動のみを行う、いわば RI の慈善事業組織であったのです。財団事業はあくまで、RI の”奉仕の理念“、“ロータリーの目的

“を達成するための”目標”の一つにすぎません。此処に財団の使命の限界があります。“奉仕の理念”とその拠って来る職業奉仕を犠牲にしてまで実践されるべきではないと思うのです。

しかし“奉仕の理念”を職業分野にとどまらず、あまねく身の回り万般にまで広げて実践しようとするのは、自然の流れであります。財団の誕生には、それなりの必然性があったのです。しかし1917年という、RIが未だ親睦か奉仕かで揺れ動いている草創期に誕生したのは、アーチ C.クランフという人物の独自のポリシー、人生観が深く関わっております。時期尚早だったのです。案の定寄付が集まらず、30年間は開店休業状態でありました。

これにBreak・Throughを与えたのがポール・ハリスの死去であります。彼の功績を称えて、「国際親善奨学金制度」が発足したのです。1965年には、異文化交流事業として、GSEも発足しました。このように教育事業は職業奉仕と並んで人づくりの一角を担う重要課題であり、財団に信託された慈善事業の中でも、とりわけ重要な事業だったのです。

またRIは究極的には世界平和を希求する組織であります。「平和は力では保たれない。平和は、ただ分りあうことで達成できるのだ」(アルバート・アインシュタイン)の示すとおり、世界の青少年交流は世界理解、親善に貢献し、世界平和への遠回りのように見えても近道なのです。

一方、教育事業と共に、財団事業の一角をなすものに**人道的奉仕活動**があります。1968年RI理事会は世界社会奉仕(WCS)を導入しました。(当時の世界のロータリアン数約60万人。日本4~5万人)これは資本主義の落とし子、「貧困の悪循環」からの救済策でありました。ところがこれがロータリーに大きなターニングポイントを与えたのです。

「WCSとは、低開発国のクラブあるいは地区が、自国の生活水準向上のための、人道的奉仕活動を立案実施するにあたって、先進国の地区あるいはクラブが援助の手を差し伸べ、もって生活水準の向上、および、両国の相互理解親善を推進する」ということであり、世界における社会奉仕活動で、地域における社会奉仕活動の延長にすぎないという主張であります。

当時、第2680地区の重鎮であった直木太一郎パストガバナーは、事情も十分把握できていない外国で人道的奉仕活動を展開するといった、分度を越えた、このようなこ

とを繰り返せば、やり方次第では、将来に禍根を残すのではないかと、疑義を訴えたのです。直木氏の考えを忖度して私見を述べれば、**人道と言えば全て善だとする錯覚に陥り、理論無き実践が際限なく広がることへの杞憂**だったのではないのでしょうか。

ただここで私たちが認識しておかねばならないことは、国際理解はお金でできることではないのです。この事業を通じてよほど互いが行き来して交流を深めない限り、わずか数回の交流では、単なるお金による支援にとどまり、マックスウェーバーの言葉を借りれば、ローターが物財奉仕に傾斜して、「精神の無い専門人」に墮していくことになるというのです。

RI 戦略計画、財団の補助金制度

こんな思惑をよそに、RI は世界社会奉仕活動を推進するためにいくつかの経済的支援制度を導入しました。1965 年の同額補助金制度、これは後にマッチング・グラント制度と呼ばれるようになったのです。経済的援助の極めつけが 1991～92 年度から実施されている、シェアシステムであります。

補助金による経済的な支援を得て、マッチンググラントプロジェクトは花さきましたが、三つの反省点を生みだしました①プロジェクトが多岐にわたりすぎ、それぞれが世間にインパクトを与えなかった。あたかも他人お金を他人のために使うがごとく、節約も効率の原則も働かず、費用対効果の失敗であります。プログラムの簡素化と重点化が必要になったのです②マッチンググラント申請が急増し、事務手続と事務処理の簡素化が急務であると悟りました。③財団運営を寄付金の投資収益に頼ったために、世界の経済事情で財団運営が左右される結果となっていました。世界の経済事情に左右されない新しい資金の流れの必要性を迫られる結果になったのです。この反省に立って改善策を講じたのが 2010 年の RI 戦略計画、2013 年の「財団の新しい補助金」制度に他ならないのです。この間の事情は皆さん既に地区の財団セミナーその他で学習済みのことであります。

戦略計画では 3 つの優先事項が提示されました。①クラブのサポートと強化②人道的奉仕の重点化と増加③公共イメージと認知度の向上であります。それに加えて 2014 年 10 月の RI 理事会は 4 つ目の優先事項に④財政的継続性と運用有効性の向上を採用し、財団支援策を打ち出してきているのです。

2013 年からの「財団の新しい補助金制度」では文字通り補助金の運用方法に大幅な改正が加えられました。世界の 6 つの重点分野(平和と紛争予防／紛争解決、疾病予防と治療、水と衛生、母子の健康、基本的教育と識字率向上、経済と地域社会の発

展)に特化した大規模プロジェクトの導入であります。更に、2014年10月財団管理委員会は4つの優先事項①永久にポリオを撲滅する②ロータリー財団に対する知識、参加、寄付を向上させる③財団の補助金と6つの重点分野を通じてロータリーの人道的奉仕の質と影響を高める、④「ポリオの撲滅に対する財団の成果と、100年にわたって世界で良いことをしてきた財団の歴史にかんがみて、財団のこれまでの成果と実績を強調し、財団の世間へのイメージと認識を高めると発表したのです。

今年度RI会長ジョン・ジャーム氏の2016年版戦略計画として、RIと財団の融合した戦略計画を打ち出してきました。それによると、3つの優先事項の中に財団の4つの優先事項が組み入れられているのです。まさにRIと財団の融和であります。

長い間認知度の低迷、アイデンティティーの欠如の危機に立ったRIは、財団と融合した戦略計画によって、6つの重点分野に特化した人道的奉仕の重点化で一举にRIのアイデンティティーの確立、RIブランド、イメージの確立を目指したのです。

2016年規定審議会で、RI提案として「RIの戦略計画委員会の委員を8名とし、うち4名はRI理事会により、4名は財団管理委員会により任命された、RIと財団の合同委員会とする」というRI理事会提案が採択されたのです。ここにもRIと財団の融合が認められます。

一連のこのような動きは、RIと財団の融和どころか、“**財団のRI**”になった感があります。財団に軒下を貸して、乗っ取られたRIの感があります。RI上げての、**理論無き人道的奉仕活動の支援は、もはや倫理運動体への回帰は不可能だ**ということでしょうか。ウルリッヒ・ベックの”**危険社会**”ではありませんが、RIが**もはや未来を予測したり、保証できない危険な領域に踏み込んでしまったこと**なのではないでしょうか。

ロータリー先進国と言っても、平均的には人口1万人当たり、6~7人の会員数です。この程度ではRIの持つ社会的な効果も知れたものではありませんか。分度をわきまえて、本来身の丈に合わない大きな事業に手を出してはいけません。1989-90年度RI会長、ヒュー・アーチャー氏は「ロータリーはスケールの大きなものから力を売らなうか」語りました。職業奉仕に徹することだけで、十分な存在意義があるはずですが、現在でも職業上の不祥事、それもロータリアンの関与する不祥事であってみれば、天上の星ばかりを追い求めるあまり、足元をすくわれてしまっているのです。岡田徹氏の「人の心の美しさを満たそうよ」の詩があります。「小さな店であることを/恥じることはないよ/その/小さなあなたの店に/人の心の美しさを/一杯に満たそうよ」であります。

こうして、心集めのロータリーは、お金集めの組織に変貌して、一人でも施主の多からんことを祈り、1 円でもお布施の多からんことを祈り、次から次にお金をつぎ込まなければ事業を継続できない火の車から降りられなくなっているのです。そして、職業奉仕は挽歌のような悲しい響きを持って影を落としていくのです。考える組織から勘定する組織への変貌であります。ロータリーは別組織になってしまったと言われて、だれが胸を張って否定できるでしょうか。はたしてこの変貌は正しい方向に向かっているのでしょうか。財団の使命の限度を超えた奉仕活動になっているのではないのでしょうか。

オバマ、アメリカ大統領は「富める者が欲しいままに富を得ることが、社会の貧者の底上げに通じるというフリードマンの考えの過ちを指摘し、心の糧を欲しいままにすることこそが、社会、世界の改善に通じると語っているのです。今や西洋的思想より、東洋的思想を世界は求め始めているのです。

この“財団のRI”への変貌によって、今や、ロータリーの理念、目的が、1917年ロータリー財団の父アーチ C・クラフが財団の恒久的モットーとして掲げた「世界で良いことをしよう」(Doing good in the world)、使命として掲げた「ロータリアンが健康状態を改善し、教育への支援を高め、貧困からの救済を通じて、世界理解、親善、平和を推進する」にとって代われようとしている感があるのです。

これまでの財団の実績で最も評価されている成果はポリオプラスプログラムです。今やポリオの常在国はパキスタンとアフガニスタンの 2 国のみです。2015 年は通年でパキスタン 54 例、アフガニスタン20例にとどまっています。一方においてシリア、イラクといった中東の紛争地帯では新たな患者の発生が報告されたとも仄聞されます。また、2015年にポリオ常在国リストから外されたナイジェリアで2016年7月、新たな野生型ウイルスによる3名の患者が WHO によって確認されました。今ナイジェリアは再び常在国となっています。まさにポリオ撲滅は世界平和なくしては達成できないのです。ポリオ撲滅の次に来るであろう RI の重要課題は平和に関するプロジェクトではないでしょうか。これは既に始まっております。1987～88 年度、平和フォーラム開催を契機に、1997年、平和センター設立、2002年世界平和フェロー制度の開始であります。

このように RI は徹底した成果主義によって認知度向上、RI のアイデンティティー確立の方針をとっております。しかし、職業奉仕無き奉仕活動は、空虚であり、欺瞞でさえあると思うのです。

RI のこれから、2016 年規定審議会の意味するもの

RIのこれからを考える上で、今年2016年4月の規定審議会の結果が大きな示唆を与えるように思います。提出された制定案117、採択された制定案47と、数の上では例年に比べて決して多くない、むしろ近年では最も少ないものでしたが、わが国のロータリアンの中に衝撃が走ったのです。RI副会長、RI理事のジェニファー・ジョーンズ氏は記憶に残る画期的な規定審議会と語っています。それは何故か。クラブ定款に例外規定を設定するという前例のない手法で柔軟性をクラブに与えたことです。これは主にRI理事会主導で行われました。例会回数、例会出席義務、欠席に伴う会員身分の自動的終結、会員資格に柔軟性を与えたのです。いわばロータリーの心、“奉仕の理念”を育むための根幹をなす組織原理に対して、柔軟性と称してRIの持つ一部の直接監督権を放棄する事態になったのです。

しかし、これは既成事実に対する、追認に過ぎない面も持っております。例会回数の議論の中で、クラブの多くは既に例会を開催していない。また、長期のバケーションで2か月間例会を開催していないクラブが存在しているという発言を聞くに及んでは、まさにその感を強くするのです。

RI理事会決議で2001年(Eクラブ問題を対象)ごろから、クラブに革新性と柔軟性を与えるために、RI定款、細則、クラブ定款に従わない試験的プロジェクト参加クラブ(Pilot project、clubs)を募って、会員資格、例会頻度、出席等のクラブ運営方法の検討が行われました。2013年からは参加クラブ数1000クラブ、期間6年間を限度に実施されております。その結果をRI理事会が検討した結果も今回の規定審議会で反映されています。しかしこれは、心理学でいう、ホーソン効果もあって、試験的プロジェクトの結果を尊重して採用しても、必ずしも正しい方向に導くものとは限らないリスクをはらんでおります。

今回の規定審議会の結果が意味するものは、200か国近くに及ぶRI参加国、会員たるクラブ数34000以上、会員数120万人以上という巨大組織RIにおいては、もはや最大公約数。標準的基準(standard)を見出すことが不可能になったということであります。世界には国民性、宗教、言語、政治形態の違いでロータリーの在り様は異なります。RIは最大公約数をもって世界のクラブを直轄管理してきましたがもはや、その最大公約数を見いだせないほど多様化したということです。土台成熟社会と未成熟社会を同一に律しようとするところに、そもそも無理があったのです。

私たちが、RIを何となく納得できないと思うようになった1990年頃には既に会員数は120万人の飽和状態に近づいていたのです。

RIのクラブへの直接監督権の放棄は、既に1968年当時RIが提示していた職業分類表の放棄の頃から始まっています。そしてこの度の、直接監督権の放棄は、見方によれば、RIの弱体化、衰退への序曲と考える人もありますし、斉藤直美、現RI理事の

言葉を借りれば、世界の変化に対応しようと RI の自己防衛策ということになります。1915 年来地区制を敷いて、直接管理体制をとってきた RI は、巨大化して会員の多様性が顕著となるに及んで、制度疲労を起こし、中央集権から地方分権へ、中央統一から中空均衡制度へ転換し、RI は連邦政府化したのです。

全世界のロータリークラブは、クラブ細則を通じてクラブの自治権を発揮すれば自分たちが望むクラブの構築が可能となるのです。

さてわが国のクラブはどのようなクラブになるのでしょうか。世界のクラブはどのようなクラブになるのでしょうか。まさにロータリアンの真価が問われ始めているのです。

クラブ運営に幅広い自治権を与えられた世界のクラブはどこに行くのでしょうか。世界の人口は 2050 年には、96 億人に達します。内 83 億人が後進国、13 億人が先進国の人口が占めます。因みに 2003～13 年間の会員数の動向をみますと、右肩上がりの国は、ドイツを除いてすべて発展途上国であります。インド+38%、韓国+26%、ドイツ+27%、台湾+49%、ブラジル+8%であり、先進国は、アメリカ-15%、日本-21%、イギリス-10%、オーストラリア-14%、カナダ-14%と減少しています。

ロータリーの地殻変動の結果によって RI に求められる役割は、自ずから変わってきます。人道的奉仕の重要性は否が応でも増してくるのです。それにつれて、後進国では人道的奉仕活動による支援を求めるクラブは多くなるでしょう。今やロータリーはロータリー産みの親アメリカでさえ手に負えなくなっています「理論無き実践、犠牲無き奉仕」の世界の広がりであります。

それではわが国のロータリークラブの行く末はどうでしょうか。戦前、戦後を通じて日本のロータリーが追い求めてきたあの、**職業奉仕を中心に据えた日本のロータリーの精神文化の復活**は今すぐにでも可能でしょうか。そうはいかない現状にあるのです。それは何故でしょうか。戦後、それも会員数が右肩下がり減少を始めた、1996 年以降、特にここ 10 数年は、急速に会員の質は低下してきたのではないのでしょうか。

戦後の日本のロータリー

RI が奉仕哲学の追求ではなく、奉仕活動の実践に大きく傾斜した原因は、もはや RI は倫理運動体ではなく、NPO 法人に変貌しようとしているからです。

日本のロータリアン数は 1996 年 13 万人をピークに右肩下がり減少し、2007 年には 10 万人を切り、インドに抜かれ、2014 年には 9 万人を切り、現在 87000 人台であります。会員増強を喫緊の課題として、やみくもに会員増強を図った付として会員の質は急速に低下してきたように思われます。そしてロータリーに対する情熱は急速に冷め

たものなりました。

①奉仕哲学の追求に熱心でもなく、かと言って奉仕活動の実践に熱心でもない、適当に財団に寄付することによって、奉仕を糊塗する、ひたすら楽しい、楽しいのロータリー、楽しくない、楽しくないでやめていくロータリーになってしまっています。②RIと正面から相対することもなく、クラブ自治権と称して何もしない自治権を振り回し、ますますRIから遠ざかってきております。1983～84年度RI会長、ウィリアム・スケルトン氏は“ロータリアンとしての最悪の罪は、憎しみでも何でもない、同じクラブのロータリアンのやることに無関心であることである”と語りました。DLP,CLPと言っても関心もなく、理解もし得なくなった現状があります。無関心、無責任、無気力、無感動は組織を内部から崩壊させるのです。

”日本精神“への期待

お茶の水女子大学名誉教授、数学者の藤原正彦先生は、著書“国家の品格”の中で“これまで世界中の、どこの国も真似が出来なかったような日本の国柄とは、一言でいえば情緒と形、わびさびの心情であります。とりわけ「惻隠」と「卑怯を憎む心」である。悪いことは悪い、そこには論理や合理性はなく、問答無用の世界があります。会津藩の藩校、日新館の仕の教えで説く、ならぬものはならぬで、あります。家庭や学校での教育、しつけの基本はそこにあるのです。しかし今これがグローバル化の前に、欧米の合理、論理、理性に蹂躪されて失われてきているのです。失われたこの日本精神を取り戻した時に日本の明日があり、世界がこれに見習ったところに、明日の世界があるのです”と語られております。

2011年国難ともいふべき”東日本大震災“が日本を襲いました。この時に採った日本人の集団行動が世界に深い感動を与えました。2011年12月22日付、インド、グジャラート州,Rajkot Midtown RCの週報に”大震災に際して日本人が採った稀有の描写に値する、威厳ある集団行動、真似すべき真の市民資質“といった表題の記事の中で”高い技術力、犠牲的精神、略奪無き秩序ある行動、冷静なマスコミの対応、威厳、優しさ、冷静さ、優雅さ、良識、訓練された行動が例を挙げて紹介されておりました。そして最後に“これが国家を偉大にする”と結ばれております。

私達は論理的だから常に正しいと考えることは、誤りであり、論理は所詮、情緒によって選択される仮定の上に構築されるものです。情緒は本能的な愛情ではなく、教養によって後天的につくられるもので、愛も憎しみも越えた純粹に美的な雰囲気です。ロータリーにも、政治、経済にも、人生万般に求められるものです。したがって洋の東西を問わず、洗練されたより高度の情緒の涵養が重要なのです。

現在は、政治形態、国民性、宗教、言語などの違いからくる、競争、争いの世界ではなく、協調、平和、安定が求められているのです。その明日の世界を開くのも西洋的、論理的性格ではなく、東洋的、情緒的性格と考えられているのです。

結びに

「ロータリーを顧みて、これから」を要約すれば、RI は1915年地区制を敷いて直接管理体制をとりました。そして倫理運動体としてスタートしたのです。それは「親睦と奉仕、利己と利他、理論と実践の調和」の世界でした。それを可能にするのは、寛容の哲学であり、これは皮肉にも、生みの親アメリカの、非寛容、ロジカルな思考という西洋的思想ではなく、寛容、エコロジカルな思考の東洋的思想に属する組織だったのです。

会員数は1985年 100 万人を超え、1995年 120 万人という飽和状態に達し組織は巨大化したのです。増大した、各会員の価値観は多様化し、この東西の温度差のみならず、南北の貧富の格差による温度差のために、倫理運動体から、物財による奉仕形態をとらざるを得なくなって、NPO 法人化しました。

同時に例会出席重視、限定会員制度、会員資格という奉仕の理念を育む、原理原則に制度破綻をきたし、例会出席の規定は 1995 年から相次いで緩和され、ついには 2010 年例会出席は50%をもって可とされ、職業分類は 2001 年 10%ルールが導入されたのです。

更に 2016 年規定審議会は、クラブ定款に例外的条項を設けて、これら中核的原理原則に対する直接監督権を放棄するに至ったのです。かくして直接管理体制も制度破綻し、間接的管理体制に移行したのです。各クラブは大幅な自由裁量権を認められ、半ば半独立組織となり、RI は連邦政府の形態をとるに至ったのです。そして NPO 法人と倫理運動体が共存する形態をとるに至りました。

益々進行する、先進国と発展途上国の会員数のバランスの変化がもたらす、地殻変動によって、倫理運動体を目指すクラブと、NPO 法人を目指すクラブの 2 極化がこれから進行することでしょう。この中であって我が国のクラブの大半は倫理運動体としてのクラブを目指すでしょう。それには、失いかけた日本精神を取り戻すことが肝要です。

2050 年には日本の人口は1億人を割り込み、会員数は6万人を下回ります。ゾーン数は2つとなり、毎年一人のRI 理事を送り出すのがやっとなります。これまで経済的貢献をもってのみ存在感を示してきた日本ロータリーは、今こそ日本精神を以て RI にリーダーシップを発揮できないものでしょうか。それには、人間力、ロータリアン力と共に、英語力を含めた豊かな国際感覚を身に着けなければならないと私は思うのです。

ここ十数年の間に失った我が国のロータリー精神を取り戻すことは容易ではありません。劔田ガバナーが信条として掲げられた「**One profits most who attends most**」、**最も出席するもの、最も報われる**」と言えるのは、かつてのように例会が「人生の道場」でなければなりません。そのためにはクラブを烏合の衆、縁無き衆生の集まりにすることはできません。“霧の中を行けば、覚えずして衣湿る”の組織づくりが必要です。つまり親睦を通して奉仕の精神を育むということは、ただ感性的親睦によって、自然に奉仕の心が生まれるというのではなく、高潔性をもった良質の会員との精神的親睦によって、その切磋琢磨、自己研鑽によってはじめて育まれるという意味なのです。

人間の意識を変えることは、一朝一夕にはできません。日頃の自己研鑽の積み重ねであります。劔田ガバナーの信条の提案は、現状に対する大きな挑戦であります。劔田ガバナーにエールを送り、第 2630 地区のご発展を心から祈ってやみません。最後に、本日このような機会をお与えいただきました、劔田廣喜ガバナー、伊藤正隆代表幹事、島 良明大会実行委員長はじめ関係者の皆さんに深く感謝申し上げます。これを以って私の話の結びといたします。長時間の御清聴本当にありがとうございました。